

御幸町だより

No.146 2021年7月25日

京都御幸町教会

〒604-0933

京都市中京区御幸町二条下る
山本町434

TEL・FAX (075) 231-3441

『問われているのは？』

牧師 村島 義也

正直、コロナ禍をこんなに長く過ごすことになると思ってもよらなかった。気象が荒れて毎年のように災害が起こる。災害、疫病、こんなことに見舞われると人は神に問いたくなる～「なぜこんなことが…神さまなぜ?」。でも神のせいなのだろうか。

確かに台風や地震のような自然災害のことを「天災」と言う。しかし今日、地球規模で深刻化している災害や病について、それらは自然に対しむしろ人というものに災いした結果ではないかという学者も多くいる。「自然災害」の被害には多分に人災の側面を含む。例えば（なお検証を待つべきだが）、今年の熱海の災害には宅地造成の盛土が被害拡大の要因として疑われている。荒ぶる自然も温暖化に起因するのであれば、人間の生態が招いた禍であり、病気になって熱を出している地球環境の呻きなのかもしれない。

ウィルスについて言えば、テレビ番組のペストの歴史を振り返る特集を見たが、そこでの専門家のコメン

トが印象に残った。曰く、「伝染病っていうのは、人間がその自然の一部である限り、決して無くならないものだと思っています。どのウィルスが流行し、どの細菌が流行するかを決めるのは、私たちの社会の在り方であると。どんな感染症が出てくるのかということになると、それは私たちの社会の弱さを突くような形で、感染症というのは恐らく現れてくる」（長崎大学熱帯医学部研究所教授・国際保健：山本太郎氏）。「人間の罪（悪）の故に大地が呪われる」というのは創世記における原初史（1～11章）のモチーフの一つだ。新約の〈被造物がすべて今日まで、共にうめき、共に苦しみを味わっている〉という言葉の思い起こす（ロマ8：19～22）。

人は神に問うのだろうか。否、むしろ事象において我々人間こそが問われているのではないだろうか。今、この時に。

医療と聖書 ～後編～

ト部 論

私は自分の無力さのため、研究にのめりこんで行った。当時は遺伝子の解析は始まった時期で、新しい研究が多くなされ、多くの病気の原因が解明され、治るようになっていた。癌においても、遺伝子解析で、21世紀には克服できると皆考えていた。私も留学先で、今 COVID-19 の診断に使われている PCR を学んだ。当時は発明され、1年目だった。日本に戻ると大学では私が初めてで、これからは何でもできる、21世紀には病気を無くすことが出来るような気持ちで研究に没

頭した。30歳前半である。体力もあり、深夜12時、1時頃まで研究していた。そのころ、父より「医療は心だ、患者さんの治そうとする力を支えるのだ、漢方を学べ」とよく言われた。私は完全に時代遅れで、バカではないかと思った。医療は科学だと、未来は科学が開くのだと高をくくっていた。そして、教会の事も忘れていた。やがて、研究も一段落がついた時、ふと臨床がやりたくなった。患者さんと話がしたくなったのだ。怖いと思っていたお産、手術においても自信が